



AA日本ニューズレター

NPO法人AA日本ゼネラルサービス (J S O)

No.141

Go (o) d Bye A. A. ! 大河原 昌夫

この3月で、5年あまりの常任理事生活が終わった。もう、あの熱気に満ちた常任理事会と評議会に出席しないと考えると禁断症状に苦しむ。A類理事の話がやってきたのは2004年の秋だった。その年の12月にはじめて理事会に参加、前任の田辺等先生に聞くと、理事会の出席率は8割を超えるという。大阪からやってくる佐古恵利子さんは朝の5時に起きて新幹線に乗るといふ。

当初は札幌や大阪から来る人より不熱心では申し訳ないと考えたが、回を重ねると前回の積み残し議題が気になり、休めなくなった。かくしてほとんどの理事会に顔を出さず結果となった。

会議で受け取った分厚い書類と評議会報告はいまも書棚の一角を占めている。一つひとつの書類を取り出すと、そこでの激しい議論を思い出す。グループの良心とAAの伝統の関係、献金を呼びかける文章の適切さ、評議会の分科会のあり方と時間配分、広報フォーラムの人選問題、適切な専従職員の数と賃金、書籍のインターネット販売の是非、実に多くの議論を経験した。ほかのどの組織においても経験したことのない真摯な議論であった。

ある議題が私にとっては他人事であっても、AAメンバーにとっては生き死にかかわる、看過しえない課題なのだと思えるようになった。私は年に5回の理事会に上京し、議論に加わるだけでよかったが、B類理事は理事会の前日に別の委員会を開き、書類をまとめ、多大な労力を費やしている姿を見た。この熱意は現在の日本社会で特別だ。

理事会の議論はしばしば紛糾した。昔は取っ組み合いもあったと聞くが、私の在任期間はそこまでは行かず、それでもかなり険悪な雰囲気になることはあった。

A類理事の役目の一つは仲裁に入ることらしかったが、私の性格からそれは難しかった。私の発言が紛糾の元になっている場面も多かったのだから。

私はいかなるときも、「私が議論をしている相手は昔は飲んでいたので」という考えに陥らずにすんだ。「アルコール依存症の人はなぜこのように考えてしまうのか」と悩む経験もしなかった。アルコール依存症に特徴的な性格は存在しない—とは米国のA類常任理事を務めた、著名な学者でもあるG.Vaillantの主要な研究結果でもある。

「これ以上、議論がこじれると誰かがスリップしはしないか」との妄想も思いつかなかった。そもそも、理事会の任期を振り返ったときにはじめて、この感想を思いついたのであって、任期中はまったく、理事会メンバーの飲酒に感想を持たなかった。飲酒していた過去を具体

的に知らないという幸運もあったかもしれないが、飲酒をしていた頃を思い出そうとする欲求は湧かなかった。

理事会の昼休みはGSOから歩いて10分足らずの定食屋でとるのが常であった。春は通りすがりの小学校の桜が美しかった。美味しいきんぴらゴボウを食べながら、さっきまでの沸騰が嘘のように穏やかな顔を見て、逆に議論の真剣さを思い、敬愛の念を抱いた。

今年の2月、最後の評議会の帰り、私は旧知の仲間と車で山梨まで戻った。その車中で、この14年間に合った山梨のアルコホリックを思い出した。私が山梨県の病院に赴任した頃、AAは週に2日、甲府市内で細々とミーティングを続けていた。住み始めて間もなく、多少のアルコホリックが集う私の外来の日になると、ある甲府AAのメンバーが現れて、「だれかAAに来そうな人いない？」とこやかにしていたのがいまとなっては笑い話である。

あれから年月が経ち、山梨のAAメンバーの多くが知り合いになり、個人史を知るメンバーも増えてきた。だが、車中でその人たちの名前を思い出しながらも、かれらの過去をすっかり忘れていた自分を発見した。関心が消えるとはこのような現象を言うのだろう。

私にとって回復したアルコホリックの過去はどうでもよくなっていくらしい。それは、私のAAに対する感謝であり、私は果報者であった。

私はなぜ、昔つきあい、苦勞をしたアルコホリックの過去を忘れたのだろう。答えの一つは回復の非連続性であると思う。

ほとんどのアルコホリックは飲酒をあきらめる課程で迷って来たと思ふ。つまり、まだ飲みたいという気持ちを抱え、しかし、それを乗り越えて飲まない道を選んできた。迷いは否定材料ではなく、人間的である。ただ、結果として、比重として飲まない道をたどってきた。結果だけははっきりとした二者択一である。

この曖昧さを許さないのがアルコール依存の特徴でもある。摂食障害であれば、そうもいかず、過食を徐々に減らす試みは大いに有効であり、過食かどうか自身が判断に迷う場面もありうるだろう。

アルコール依存症の診断がされてなお、飲み続けるアルコホリックについて「元の酒飲みに戻れるとの幻想を抱いたため」と説明されることがある。現実にはもとの適正飲酒(?)に戻る可能性がないにもかかわらず、そこに挑戦してしまう心理状態をいうのだろう。

だが、私が見てきた、飲酒を繰り返す人々は「飲酒をしても、また回復したアルコホリックに戻れる」との幻想が強いように思う。つまり、「いつでも回復は出来る」

と信じ、飲酒と断酒の間をかなり自由に往来できるとの観念から自由になれない。

そういえば、多くのアルコールは「酒は止めようと思えばいつでも止められると思ってきた。それが間違っていた」と述懐する。

回復とは、飲む自分と飲まない自分の間に決定的な断絶があり、自由往来の不可能性を信じ、往来の出来ない＝不連続な事態を信ずることである。

酒を止めて安定していると（少なくとも傍からは）見えるアルコールが「また飲むかもしれない。いま、飲まないでいるだけ」と語ることがある。それはアルコール依存症の怖さを語っているのだろうが、現実を反映はしていないと私は思う。

スリップをする人はいるが、「もうスリップとは無縁だ」と感ずるときがあるはずだ。それは「回復の非連続性」を語っていると思う。非連続だからと言って、ある日突然くるというのではない。日々の努力の積み重ねでくるが、それでもどこかで後戻りのない、非連続感が生ずると思う。

私はあるとき、回復をはじめて1年以上が経過したアルコールに聞いてみた。全員が最後の飲酒の日時を正確に記憶していた。最後の飲酒はそこから非連続の闘いが始まった、忘れたい記念日なのだ。

不連続感は自己と周囲に安心を与える。私が理事会や評議会に出会ったアルコールに感じた安らぎはここに由来していたと思う。だから私は安心して議論を交わすことができた。

私の敬愛する、あるアルコールは理事を辞任するとき、「これで最高の役割である、グループの皿洗いに戻れる」と言った。私にはグループがないのだが、アルコールの回復につきそう人生は続けたい。私は残念ながら神を信じないのだが、**Go(o)ld bye AA** である。

大河原昌夫・元 A 類（ノンアルコール）常任理事

第 15 回日本全国評議会を終えて

思えば第 15 回日本全国評議会は、あつと言う間に終わってしまったというのが第一印象です。

しかし、それまでに自分がしたことは、1 月初旬に参宮橋の国立オリンピック記念青少年総合センターで「議題に関する勉強会」を関東甲信越地域の仲間数名と常任理事をお招きし、事前に各議題内容を頭の中に叩き入れることをしました。それでも何かもの足りないと感じ、数日後事務局の方に急きょお願いして 3 時間余り議事進行などについての Q & A をしました。

また、始まる直前まで議事進行ルールに沿いながら、担当する議事委員会分科会のレジュメを何度か手直しをし、そわそわする気持ちを何とか抑えようとしていたのです。

初日の第 1 回全体会議直前に A 4 用紙 2 枚に書かれた“全体会議進行上の確認(参考)”を担当常任理事から“議事委員会からの提案と確認”の時に使ってくださいと渡されたものですが、不信感を抱くことになりました。(※この時間帯は体調不良の為に事務局の方に代行して頂き

ました。)

今回の全体会議、ディスカッションミーティング司会進行担当者も直前に進行表なるものを渡され、それに沿ってとのことでしたが、いたるところで進行が止まってしまいました。各進行担当者の困り果てた顔は今後も忘れることができないでしょうね。(何故もっと早く渡すか、打合せができないのか?)

期間中に評議員以外の方が「こんな評議会の進行は私にとって拷問でしかない!」「これで 7 回出席しているけど最低!」の声が全体会議中に聞こえ、何ともやるせない思いでした。

私たちの半数は昨年評議会を経験しましたが、常任理事と WSM 評議員のために日本全国評議会を円滑に進めなくてはならないのですかね? 先ほども書きましたが、直前になって担当常任理事から台本のような進行表(たぶん事前に常任理事会で打ち合わされた内容では?)を渡されても思うようには行かないのです。

本当に残念だったのは、日程上の都合はあると思いますが、各議題について十分に審議されたのだろうか?(退任される常任理事の方の言葉と重なります)、私自身はできなかったと反省しています。それと議題の中には評議会に上がってくる前に地域、地区、グループにおいて十分に分かち合われたのかが不明な議題もありました。(※地元での AA の伝統に絡む解決において、リーダーシップを発揮します) 問題解決には時間がかかること覚悟しなくてはならないと改めて勉強になりました。

2 月の全国評議会を終えて 50 日ほど経ちます。先日、九州沖縄地域の仲間から「まだ評議会が終って時間もあまり経過していなのに、懐かしく感じました。(仲間ってほんとに良いですね) 私自身の中に評議会を経験させていただいた中で、一本の柱(骨格)が感じられます。歩ける所まで、仲間と共に歩いて行きたいと思っています。」のメールが届きました。読んでいるうちに胸の中に熱いものがこみ上げてくるのを感じ、少しの間目を閉じ自分自身の思いを確かめていました。

私は今年のうちに各地域評議員と評議会についての分かち合いの時間を持てるように動いてみます。

また、今回の評議会報告のために各地区委員会に行きますが、許される範囲内でサービスの楽しさ、辛さから得られた経験(飲まないで生きていく喜び)を伝えていきたいと願っております。

関東甲信越地域評議員 瀧澤(高砂グループ)

35 周年集会からのいただきもの!

みんなの力で織り上げた AA 日本 35 周年記念集会は、素晴らしい時間を私達に与えてくれました。本当にありがとうございました。

2007 年 9 月、最初の実行委員会が開催されました。イベントの規模、かかる経費、また開催日時が 2 年以上先であることなどから、ボンヤリとした感覚で準備が始まっていきました。30 周年記念集会に参加し、その後実行委員の人に話は聞きましたが、開催するイベントのイメージが描けないことが、最初の悩みでした。ずっと後

に気づいたのですが、「AA 成年に達する」を読むと周年記念集会のイメージを描けると感じました。その次は、どこで開催するのか、チケットの値段はいくらにすればよいのか、チケットをどのように頒布するのか、プログラムはどのように組んでいくのか、マンパワーが足りないところをどのように補うのか・・・などなど、この2年猶予の間には様々な悩みがありました。今となつては、なつくかしく楽しい思い出ですが、当時はムカつくこともしばしばで、「もう顔も見たくないわ」と心の中で罵倒してしまう時もありました。でも、3月14日幕が降りた時には、全ての実行委員会メンバーとハグしたい気持ちになりました。これだからAAのサービスは止められません！！『アルコールよりも強い惹きつける魅力』を見つけてしまいました。

今回私は、まず地域のラウンドアップの会計でウォーミングアップをし、これまで避けてきた財務を担当しました。苦手な役割を最後まで遂行できたのは、一緒にやってくれたメンバーの強力なサポートのおかげでした。やってみて改めて「苦手」だと実感しました。けれど避けてやらないことを一つ減らせた達成感がありますね。

開催当日、イベント参加はあまりできませんでしたが、みんなの力で出来上がりつつあることを肌身で感じていました。あれは不思議な経験で、素晴らしいものでした。だから3日間、私はとても幸せでした。

チケットが売れないことが心配で、いろいろな地区のOSM（オープンスピーカーミーティング）やラウンドアップに参加しました。そのおかげで、協力してくれているのはチケットを買ってくれる人だけでなく、もっといろいろな協力があることを知り、すべてに感謝する気持ちを貰えました。そればかりでなく、いろいろなAAメンバーやAAのやり方に触れ、私の中にできていた狭い考え方にも気づくことができました。『いろいろな所へ行くことで力もらえるよ』の意味をやっと知ることができた次第です。

このようにAA日本35周年記念集会は、私に様々な霊的経験を与えてくれた素晴らしい機会でした。きっと皆さんの中にも、様々な素晴らしい経験が残っていらっしやと思います。

一つが終わり、そして新たな始まりがすでに始まっています。今回いただいた心温まる想いを体の芯に覚えさせ、言葉で表わしきれない感謝をこれからの自分の行動で実践して行きたいと思います。

最後にもう一度、本当に、本当に、本当に、ありがとうございました。

35周年実行委員会 まな

常任理事の任期を終えて

通常、後期の2年間を務める常任理事3名の内、1名が議長に当たる。代表として何かを処理する時には当然必要になるので、小生がその任務についた。しかし実際の業務は3理事が理事会の司会を持ち回りでおこない、徹底した合議制で業務を進めた。途中1名の理事が体調不良で退任されたが、応募された新理事とも分担してことに当たった。

特に前任の理事から、矯正担当の理事を増員してもらえないか、という発言があった。財務予算の縮小期待が

多い時にそれは応えきれない事案だった。飾りでよければ私になつてもよいという発言をうかつにもしてしまった。結局、矯正・保護施設関係は全理事で分担し、財務もJSO担当理事と協働したのは、我々にとって良かったと思っている。

また、広報担当理事から、日本ニューズレターの編集をJSOで引き取ってもらえないか、という話が理事会であった。その時はJSOも、ある部分でその編集にかかわっていたが、JSOでも誰か代わってほしいとの思いが強かったようだ。そこで私が個人のメンバーとして仲間を募りチームでしばらく担当した。今はJSOにお返ししている。

理事会の司会では、当初、私は意見の重複を避けて議事進行に努めた。同じことの繰り返しを敬遠して時間の節約を期待してのことだった。しかし後半、そこに居合わせた人たちの理解を深めていくには同じことの繰り返しも時として歓迎すべきと思うようになった。時間的効率のみを考えているより遥かにゆったりとした議論ができるようになったと思う。

常任理事の選挙制度が変更になったため、はからずも今年の3月の35周年に任期中に出席した。今回の記念式典には特に常任理事としての挨拶はなかった。これは良かった。参加者一人一人が主役だった。それは最後の「みんなで一言」によく表れていた。アメリカからはるばる参加してくれたWSM評議員やA類常任理事もみんなと同じように一言を述べた。同じように長い列を並んで待つ。AAの真骨頂だった。

JSOの人事は句読点を打てずに、次の理事会にバトンを渡すことになった。すべての職員に当てはめるわけではなかったが、年金受給者等に、社会保険等は個人負担で就労してもらうことを考えた。工夫していくことが求められている。

常任理事会も評議会も、催しの実行委員会もたった一つの目標に向かっている。サービスを通じて伝統5の「いま苦しんでいるアルコール依存症者にメッセージを運ぶこと」に向かっている。

元常任理事 林

4年間の任期を終えて

2005年に常任理事に立候補して信任を得て選出されて4年前の2006年から出版担当として1年に6回の常任理事会とほぼ4回の委員会に出席するためにJSO通いが始まった。

1年目の2月のAA第14回全国評議会では前任者の資料を頼りに、出版としての前年度の活動報告、本年度活動計画、提出された議案審議など無事なんとか役割を終えた記憶が今よみがえってきた。広報用ビデオ「Hope」、老人や弱視者用の大型版（B5版サイズ）の頒布開始、広報用の日本オリジナル版の男女のコミック作成の立上げなどで常任理事会出版委員会を年4、5回開催して委員全員の知恵を絞った。アメリカ・カナダのAA評議会承認出版物の著作権とJSO出版局の翻訳と出版・頒布のライセンス取得とAAWS社への権利の譲渡に関する著作権問題が小委員会の中で検討することも開

始した。

特に著作権を勉強するきっかけとなった「12&12」「ビッグブック」のJ S O外のCD作成者とのトラブル問題は、話し合いの内に相互理解の基で制作中止することで解決したことは私にとっての理事会活動の第一歩だった。ほかに、「ドクターボブと素敵な仲間たち」が発行されたが期待されていたほどには購読数は伸びなかったのは残念である。この記事を見た方は是非読んでいただきたい。

2年目は、コミック男性版「キヨシの物語」が完成し好評のうちにその年に増刷することもできました。著作権問題も AOSM 参加で来日したNY・G S Oのグレッグ所長と最終の話し合いの機会を得てほぼ解決ができた。そして「治療施設の中のAA」「BOX-916 精選集第5巻 矯正施設関連特集」が完成し、飲酒運転問題がクローズアップされた時期でもあったのでこの2冊はメッセージ活動にかなり役立ったし、現在も利用されている。

3年目、コミック女性版作成と検討作業のためとインターネット販売企画を含めた委員会はやはり4回開催した。昨年来からの出版物の在庫の増加を調整することもあって未翻訳「THE LANGUAGE OF THE HEART」「PASS IT ON」などの値が張る本の発行は当分見合わせるようになった。ビッグブック英語版個人の物語は「アルコールクス・アノマス英語版6人のストーリー」と題したパイロット版の発行は1,000部がまたたく間に売れて、ミーティングではテキストとして利用された。

4年目は、コミック女性版タイトル「それは誰にでも起こること」もやっと発行にこぎ着けて、男性版(タイトルを「私に起きた出来事」に変更した)とペアで利用されるようになった。

今年の第15回評議会で、広報としての目的が理解されずにアマゾンでのインターネット販売提案が最終的に否決されたことはとても残念であった。必要性を感じているメンバーもかなり多く将来的にはきっとグループの良心が働いて再提案されて実行されるものと確信している。

この4年3ヶ月の間常任理事会と委員会を休むことなく出席できて、微力ながら私なりに少しは日本のAAサービス活動に役立ったと思えることに喜びと感謝の気持ちで一杯である。

特に3年前から始まったAA日本全国矯正・保護施設フォーラムの第2回の島根県浜田と第3回の関西京都での開催に関わらせていただいた経験はこれからも役立たせてもらおうと思っています。また80万人を数える日本のアルコールクスやアルコールリズムになっていることを知らない人たちに一人でも多くAAメッセージがもっと届くように、機会あるごとに言い続けてきた広報と専門家との協力関係のより一層の強化を実現するために退任後も仲間と一緒にメッセージ活動を続けていきたいと思っている。

元常任理事 新村

国際協力献金のお願い

毎年6月10日を間にはさむ1週間をAA国際協力献金週間としてまいりました。

皆様の温かい「愛の手」が今もなお苦しんでいる世界中の人たちに届きますようにとビッグブックを始め、各書籍や各種パンフレットの翻訳が数多くの言語で進められ、様々な場所、それぞれの機会を通してメッセージが送られています。国際的なサービスの展開にはたくさんの費用が必要となっています。

第16回ワールドサービスミーティング報告書の1ページ目にビル・Wの言葉が引用されています。

「・・・AAの世界における真の責任とは何か、そしてそれはどうすればよりよくなえられるか—現在と将来において—、このことをより明確に理解するよう我々は努めるであろう。」そして将来とは、「今はあなたがたのものであり、そしてこれからやってくる人たちのものとなる。」

世界に広がるAAのプログラムをよりいっそう確かなものとして、苦しんでいる人たちに届ける責任を共に感じたいと考えます。

自らの飲まない生き方のルーツは1935年の運命的な二人の出会いにあること、そしてDr. ボブのソーバーが6月10日から始まったことを世界中のメンバーと喜びあおうではありませんか。

感謝と喜びを表すために、自分に今できるだけの献金をお願いします。

郵便局振替口座

口座番号 00180-0-68876

加入者名 AA JSO

通信欄に2010国際協力献金 グループ名などご記入のうえ7月末日までにご送金ください。

2010メンバーシップサーベイ

早いもので前回から3年が過ぎて行きました。AAの動態調査として1997年に第1回のメンバーシップサーベイを始めてから今回で5回目となりました。

このようなAAの現状、おおよそな実態の把握は多くの関係機関や専門家への提供資料として、とても役にたっているようです。今回より少し設問用紙の変更や回収方法など、今までと若干違うやり方になります。

5月のグループ情報の送付時にお届けする予定です。

またアンケート用紙は期間中ホームページに掲載しダウンロードできるようにいたします。

<http://www.aajapan.org>

多くのメンバーのご協力をいただきたいと考えています、どうぞよろしく願い申し上げます。

常任理事会 広報・病院施設委員会

編集・発行： NPO 法人 AA 日本ゼネラルサービス (JSO)

〒171-0014 東京都豊島区池袋4-17-10 土屋ビル4F Tel:03-3590-5377 Fax:03-3590-5419

<http://www.aajapan.org> jso-1@fol.hi-ho.ne.jp

(月～金) 10:00～18:00 (土・日・祝) 休